旬刊（毎月1日・11日・21日） ©美術年鑑社 No.1300 昭和46年10月23日第三種郵便物認可

新美術新聞

The Shin Bijutsu Shinbun —— Since 1971

1/1・11 450円 JANUARY 2013

(株)美術年鑑社
発行所：〒101-0054 東京都千代田区神田鍋町3-15 電話：03-3295-1635
発行人：油井一弘 編集人：磯貝洋次
E-mail：shinbun@art-news.co.jp

新春特別企画
東西芸術大学学長対談

蓄積と伝統
——変わらないという価値

東京藝大125年×京都芸大132年
Save and Tradition

宮田亮平 Miyada Ryohei 東京藝術大学長

建畠 哲 Tatehata Akira 京都市立芸術大学長

目まぐるしく変化を続ける21世紀。現代社会に溢れる「再生」のキーワードは、いま「教育による再生」として見直されるべき時期を迎えているのではないでしょうか。2013年の新美術新聞は「美術と教育」をテーマとした紙面づくりに挑戦します。その企画第1弾として、宮田亮平・東京藝術大学長と建畠晢・京都市立芸術大学長、東西の芸術大学長に、美術大学の現状と未来など等身大の大学像と、これからのアートの役割について熱く語って頂きました。

東西芸大の歴史と現在

——はじめに東京藝大の歴史と現在を宮田学長からいかがでしょうか。

宮田 東京藝大は1887年の創立後、今年（2012年）がちょうど125周年です。120周年のときは「日本の原点にもどろう」ということで温故知新の仕事をしてきましたが、125周年はアジアでも特に「東アジアから世界」へという考え方で、政治力、経済力もあるが、それを超えた美術力、芸術力で発信していこうと。そのときに個々の芸術家の力も重要ですが、大学の組織として動くことが大きな歴史をつくるのではないか、という感じがしたもので、今年はそういう視点で頑張りました。京都芸大は130周年の際に非常にいい仕事をされましたが、そのときに学長になられたんですね。

建畠 正確には2011年の1月からです。

宮田 東京藝大は美術学校、音楽学校からスタートし、1949（昭和24）年に大学へと変わりました。その後、大学院ができ、さらに博士課程ができたときに、「俺たち芸術家にそういう肩書は要るのか」、そんな話があったんです。大学の仕事というのは芸術家を育てる事だけではなく、教育者を育てなければならないときに、単なるモノづくりだとか絵描きだけでは、教育者としてはどこか欠損しているんではないか。すぐれた教育者はすぐれた芸術家である——その両面を持った人間を育てることが、大学の役割である。この二つが大学として課せられた大きな仕事という感じがするんですが、どうですか。

建畠 いま宮田学長がおっしゃった、東アジアを中心とした国際性、国際交流については、これは国立の大学ならではのことでもあるんですが、私たちもなるべく交換留学、交換展も含め、東京藝大ともタイアップしながら拡大していきたいと思っています。一方で京都という特徴ある街に位置しているメリットを最大限生かしたいとも思っています。それはいろんな文化財に恵まれているということもありますし、同時に新しい文化をつくっていくという独創性を重んじる風土もあります。また公立の大学ですから地域に支えられている、しかも京都という地域でありながらも国際ブランドみたいな、そういうおもしろい風土を生かしていきたいなと考えています。それは国立の大学とは違った公立の大学ならではの使命でしょうね。

それから132年という歴史では、自慢話をすれば日本の美術大学としては一番古い大学で、しかも最初は京都御所の中から出発したという不思議な成り立ちをしている大学です。多分当初は日本画を中心とした画家の養成所のような形だったと思うんですね。東京藝大と比べると学生数はほぼ半分ぐらいだと思うんですが、少人数教育ということで、アーティスト養成にかなり特化しているということは言えると思います。以前私学にもいたことがあるんですけれど、私学の場合は学生数が多いですからアーティスト養成という旗印と共に、一般的な美術を素養にして社会で普通に活躍する人を輩出するということがありました。音楽学部の方は60周年を迎えて、最近いろんな人材を輩出するようになってきました。しかしアーティストを出すという本来の目的は当然として、さっきおっしゃった教育と創作が車の両輪のように結びついている、ということは芸術系大学のあるべき姿なので、常に考えていきたいとは思っています。

2012年10月10日、アジアの芸術系大学の代表らが集い、新たな芸術創造、連携のあり方、世界に向けての発信などが議論され「藝大アーツ・サミット2012宣言」として調印された。

宮田 この間京都に行ったんですが、もう羨ましい！ 街を歩いている人は国際人がとても多いですね。修学旅行も多いけれど、実に言語が多様なのね。そして古い歴史があり、街の中全部が美術館でしたね。

建畠 京都自体が一つの大きなアーカイブだと言う人もいるので、その魅力は海外にもアピールできると思います。京都にはあの小さな街に美術大学が5つあるんですね。東京と同じくらいの数があって、人口は一桁少ないんですが、それらが競合しながらも成り立っているというのは京都の持つ求心力だと思うんです。それは最大限に生かしていきたいと思っています。

宮田 日本が成り立つには国際性がなければダメだという思いがあって、せっかく五芸大（東京藝術大学、金沢美術工芸大学、愛知県立芸術大学、京都市立芸術大学、沖縄県立芸術大学）の連携ができているわけですから、留学生とか、日本の学生も含めて単位を互換するまでは行わなくても、何週間かお互いに交流できる制度があるといいですね。大学の中での勉強はどこでも同じですから、大学を拠点としながら街へとび出していくというイベント性みたいなものを含めてやっていけたら、日本へ来てよかったなと留学生も感じると思うんです。

建畠 私たちは小規模なので、ぜひ他の五芸大と連携してプラットホームづくりをやっていきたいと思っております。特に東京と京都というのはそれぞれ特色があるので、外国の人にとっては両方の街を経験するというのは非常にいい事だと思います。

宮田 東京なんて、それほどおもしろくないんですよね。（笑）

建畠 でもやはり情報と人が集中して、歴史とジャストコンテンポラリーと両方メリットがありますから。

宮田 東京というのは新しくつくられた文化で、東京は江戸の頃からのおもしろさ、京都はもっと前のおもしろさが残っている気がしますね。

建畠 特にこの周辺（上野）にそういう雰囲気が濃厚に残っていますね。

宮田 江戸文化みたいなものが、隅田川を中心として全体に残っている。町方の職人さんなどがいるので工芸はすごく盛んですね。町方が支えてくれているという思いですね。そんなことがあるものですから、京都芸大もそうだと思うんですけれど、社会連携に相当力を入れているんです。学生は先生が評価をしてくれるものだ、そして大学の中で守られているという安心感の中で作品をつくるんですが、それは間違いで、先生が評価をするのはごくごく一つのきっかけであって、街へ出て物を見せて、街の人たちが評価する目というのはものすごく厳しいですよね。ここ何年かはUTM（上野タウンアートミュージアム）、GTS（藝大・台東・墨田観光アートプロジェクト）、それからTAP（取手アートプロジェクト）と、略称をつけ国の財源も利用しながら立て続けに街との連携をつくっていくと、学生はすごく活き活きしてくるし、先生も学内にいると先生だけれど、外へ出るとただのおっさんですからね。学生はその両方を見ているわけだから先生も頑張るし、活性化の一番いい方法と思っているんですけれどね。（笑）

——場があると皆が活き活きしてくるというわけですね。

宮田 そうそう。それと国公立五芸術大学協議会が中心となり設立した芸術表現学会。これを

すぐれた教育者はすぐれた芸術家である（宮田）

つくることによって、私学も引き込んで、さらに大きく取り組んでいけると思っています。

創造とアーカイブ

——大学の取り組みを一般に浸透するための考え方とは。

宮田 メディアをどれだけ大きく取り込むかですよ。メディアというのは諸刃の剣で、ぼろくそ書かれることもあるし、逆にいい事も伝えてくれる。期待しながら挑戦していて、思ったより悪い事は書かれてないかな。今日のように多くの人に見てもらえるきっかけができればと考えています。

建畠 宮田学長がすごいのは、メディアへの発信力、テレビなど拝見していてもタレント性があるし、我々もタジタジしてしまうんですが非常に学ぶ面があって、こういう時代ですからテレビだけでなくネット空間も含めて、出ないものは存在してないのも同じことですから、常に話題を喚起していかなければならない。私どもの考えから言うと、京都という国際ブランドと一体化して、研究にも教育にも創作にも取り組んでいかなければならないと思うんです。一番わかりやすいのは工芸ですね。京都はあらゆる工芸が集まって蓄積されていて、その歴史やクオリティーが傑出した街なんです。けれども清水焼や西陣織などは壊滅の危機に瀕しています。そうした膨大な文化遺産があるにもかかわらず、非常に厳しい状況があるわけです。そこを大学が介在し再活性化する余地があると、アーカイバル・リサーチ・センターという組織の立ち上げ準備をしています。これは単にアーカイブを蓄積し、それを整理し研究するということだけではなくて、創造のためのアーカイブと言って、創作活動やそれを生産的に生かすことを目的としたアーカイブの方法です。つまり文化財を文化遺産と言うのではなくて、文化資源と呼ぼうと。そのままでは何でもないわけで、鉄鉱石であれ石炭であれそれは単なる石にすぎないけれど、それが生産のプロセスと一体化したときに生きてくるわけですね。

これはもちろん現代美術にも言えることで、現代美術は無から有をつくることだと思っている方もいらっしゃるけれど、意外とアーカイビング的なんですね。例えば杉本博司さんという写真家の創作活動はある意味でアーカイブなわけです。「海景」にしても「劇場」シリーズにしても。そういうものと創造活動というのは、方法論的にもかなり一体化している部分がある。そういう理論的な研究、問題意識も含めて情報交換しながら、早い時期に立ち上げようと思っています。

宮田 これはぜひ京都芸大でまず立ち上げていただいて、私どもがフォローすると同時に、両極でそれぞれの違いでやれたらおもしろいと思いますね。アーカイブとは、ただ古い物を整理してお堅い所へ入れるという感覚があるんだけれど、それでは何の役にも立たないし、アーカイブとは本当に創造のための資源の開発ですよね。皆ああだこうだ言っているけれど、デジタル化しても雷が一回落ちたらお終いなんです。これは非常にいいお話ですね。

建畠 京都市にずっと要求しているんですけれど、ぜひここで宮田学長からも必要性を強調して頂きたいですね。

宮田 自分の自慢話など誰も聞かないけれど他人が「あそこの所はいいよ」と言うと、よく聞いてくれる。（笑）

建畠 そこを強調して下さい。（笑）

宮田 京都芸大は京都市に、文化庁へは両方で働きかけたいと思うんです。

建畠 東京藝大が総合アーカイブに手をつけられたときに「やられた！」と思ったんですけれど、やった、やられたではなくてぜひ連携して。

宮田 啓発し合うというのは非常に大事です。たまたま図書館の耐震工事が残っているんですが、一般的な耐震工事じゃなくて、今おっしゃったような、耐震がむしろ発信になっていくような構造体をつくっていこうと。ただしっかりしたものをつくるんではなくて、理論的な構造をしっかり持つことでやっていこうと思っているんです。

建畠 それは頼もしい。

宮田 それを「芸術図書館」と呼ぼうかと思っているんです。

建畠 ネーミングがかっこいいですね。（笑）

宮田 いろんな図書館の名前があって、大学図書館というのはあるけれど「芸術図書館」という名前はないんです。大学美術館という名前もなかったので、東京藝大が最初につけたんです。美術館はあるので今度はそれ以上のものをつくりたいと思っているんです。それにはネーミングが結構重要なんです。

建畠 今年、京都市内外にある京大や京都工芸繊維大学など13大学14のミュージアムが連携して、それぞれ情報を交換しながら、あるいは収蔵作品をお互いの共通財源にしながら、大学ミュージアムを活性化していこうと「京都・大学ミュージアム連携」を立ち上げたんです。これは東京藝大が最初に充実した施設をつくられたのでそれに啓発されたということと、僕はバックボーンが半分美術館畑なので、大学と美術館（ミュージアム）との融通あるいは共通性に非常に興味があるんです。

京都自体が一つのアーカイブ（建畠）

ミュージアムは市民を相手にし、大学は象牙の塔ではないけれど教育研究ということで、直接的に市民を相手にしているわけではない。そこに少し違いはあるけれど、今後は地域連携や国際交流を盛んにしていかなければならないので、そういう意味ではミュージアムは市民社会に対して存在をアピールしてケアしていく。お客さんは市民ですからね。大学ミュージアムという発想は、ただ単に建物をつくればいいというわけではなくて、いろんな形で生かしていく。京都芸大は市中心部から外れた所にあるので、中心には@KCUA（アクア）というオルタナティブなギャラリーをつくったんです。

（4面へ続く）

京都市立芸術大学ギャラリー「@ KCUA（アクア）」は市民の作品鑑賞、学生の活動成果を発表する場として2010年4月にオープンした。

93歳、挑む芸大生

入学を決めたのは85歳の時。
苦手な絵を描く授業では、
何度もやり直して悪戦苦闘した。
「なぜ今から」「なぜ今さら」
いろんな人に問いかけられる。
「できないから、できるようになりたいだけ」
たとえ何歳でも、遅すぎることはない。
挑む相手は自分自身なのだから。
学びつづけて、もうすぐ卒業。
生命あるかぎり成長していきたい。

［陶芸コース］Hさん 93歳 香川県

18歳—93歳。芸術と通信する、社会人がいる。

京都造形芸術大学
通信教育部 芸術学部

2013年度 通信教育部入学生募集

京都・東京を中心に年間約1000講座もの面接授業を開講。週末利用の2～3日間集中授業、2年次・3年次編入など、学びやすい体制が整っています。

◎入学試験はありません。

□芸術学 □歴史遺産 □文芸 □和の伝統文化 □日本画 □洋画 □陶芸 □染織 □写真 □情報デザイン（グラフィックデザイン／イラストレーション） □建築デザイン □ランドスケープデザイン □空間演出デザイン ◇大学院 ◇博物館学芸員科目等履修生 ◇臨床美術士科目等履修生（4・5級）

2013 NEW TOPICS

どんな環境の人でも学べる。
全てインターネットを利用した通信制芸大スタート。

［芸術教養学科］2013年4月新設

◎PCやスマホで「芸術の背景を知り、日常に活かすための学び」を提供。
◎学費は月約1・5万円（年間17万円）。
社会人でもマイペースに学べて、大学卒業資格（学士）が得られます。

■入学説明会
［京 都］1/13（日）・14（月・祝）、2/11（月・祝） 瓜生山キャンパス
［東 京］1/19（土）・20（日）、2/24（日） 外苑キャンパス
※1月の説明会は事前予約制の企画もありますので、事前にHPをご確認頂くか、お電話、もしくはメールにてお問い合わせください。

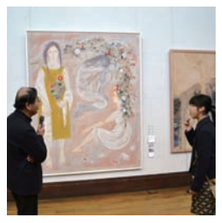
資料請求（無料）

ハガキの場合／「資料請求」と明記のうえ、住所・氏名・年齢・職業・電話番号を記入してお送りください。
宛先：京都造形芸術大学＜通信教育部＞資料請求B1係 〒606-8271京都市左京区北白川瓜生山2-116
［HP］http://www.kyoto-art.ac.jp/t/ ［Eメール］tsushin@office.kyoto-art.ac.jp
※いただいた個人情報は、資料発送以外では使用いたしません。

0120-20-9141
京都造形通信 検索

震災は「アートが何の役に立つのか」を考える機会でもあった（建畠）

建畠晳（たてはた・あきら）
1947年京都に彫刻家建畠覚造の二男として生まれる。72年早稲田大学文学部フランス文学科卒業。多摩美術大学教授、国立国際美術館長を経て現職。専門は近現代美術。1990年、93年ヴェネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、横浜トリエンナーレ2001、あいちトリエンナーレ2010のアーティスティック・ディレクターなどを務めたほか、アジアの近現代美術の企画にも多数参画。詩人として91年歴程新鋭賞、2005年高見順賞を受賞。現在、京都市立芸術大学長（11年から）、埼玉県立近代美術館長。



自然とは厳しく、淘汰されて良いものしか残らない。けれども、良いものは確実に残る（宮田）

宮田亮平（みやた・りょうへい）
1945年新潟県佐渡に蝋型鋳金作家2代目宮田藍堂の三男として生まれる。72年東京藝術大学大学院美術研究科工芸専門課程鍛金専攻修了。イルカをモチーフとした「シュプリンゲン」シリーズなどの金工作品で「宮田亮平展」をはじめ、国内外で多数の展覧会に参加。2007年第46回日本現代工芸美術展内閣総理大臣賞、09年第41回日展内閣総理大臣賞、12年第68回日本藝術院賞を受賞。現在、東京藝術大学長（05年から）、文化審議会会長、国立大学協会理事、文化財保護・芸術研究助成財団理事長、日展理事。

（1面より）
いろんな企画をして美術館的な活動をすると同時に、学生にも発表させるとか震災復興のためのオークションを行うとか。市民と直接的な交流ができるので、いろんなイベントを打っていこうと思っているんです。

そういう意味でも、アーカイブという発想も重要である。それはいわゆる昔の資料館――デッド・ミュージアムみたいな博物館とは違って、さらには大学ならではの建物――ハードよりもソフトを導入していきたいと思っているんです。

宮田　アクアは場所もいいですね。

建畠　あそこは御池通りという、東京でいう青山通りみたいなおしゃれな場所にあるんです。それは学生たちにもかなり刺激になりまして、学生は放っておくと真面目にキャンパスに籠もってしまうんですね。そういう拠点があると自ずとモチベーションを高めて勉強するというところはあります。東京藝大も、都心にありますからそういう点では有利かもしれないですね。

宮田　いやいや、当然問題もあります。（笑）

美大生の現状と未来

――学生は放っておくと籠もってしまう、という建畠学長のお話もありましたが現状はどうなんですか。

宮田　そもそもの話になるんですけれど、良い子というのは言われたことを記憶して一週間後に同じことができる子なんですよね。悪い子と言われるのは、聞いたことを忘れるという努力と、自分で変化させるという素晴らしい知恵があるわけです。だから答案はバツになってしまうんです。しかし、これは大変素晴らしいことだと思っています。忘れるというのは横に置いておいて、自分で変化させるというよさは確実にあるんです。ところが大学へ入ってきても放っておくと、籠もっちゃうんですよね。そして緻密なものを描こうとする。集中したことがとても美徳であるかのような感じがあるんだけれど、若い時代は集中と解放を時間軸の中で、もう少し詰めた方がいいんじゃないかな。解放されるときの時間軸というのは、ぼうっとしているんじゃなくて、集中以上に努力が要るものです。

そのきっかけづくりをやっていかないと絶対に駄目だと思うんです。その意識改革みたいなものは特に、美術系大学では是非やった方がいい。だから出てから困ってしまうんですよ。後は知らんぷりみたいになっているけれど、出てから35歳までは大学の責任だと思っているんです。その中で芽が出た者は放っておいてもいいという思いがあって、大学にいる間にいろんな連携をつくっていく。35歳なんていうとバリバリですし、力や感性は持っているわ、そういう人たちが大学人サポーターであると。その都度緑はあげられないが、きっかけづくりとなる緑をつくる方法論ということで展覧会などの場を提供することも、これから考えていきたいと思います。皆さん大変じゃないですか、画廊を借りてグループ展をしたり、公募展へもなかなか出さないから、そういう若者に対しても環境みたいなものを、さらに在学生、卒業生の育成のため藝大賞というものもつくりたいんです。

建畠　それはいいですね。卒業生も含めた巻き込みという話は大賛成です。

――京都芸大では学内でチャリティーオークションをされましたね。

建畠　震災からの復興という大きな求心力のあることがあってOB、院生以上の学生、教員と去年今年の2回、東日本大震災災害支援のチャリティーオークションをしました。しかもネットで公開して、これは学生たちにも刺激になったと思います。このオークションは作品の画面にはサインがなく、絵柄だけで判断して入札し、落札後に作者名がわかるというスリリングな仕掛けでした。学生も先生も巨匠も同格で参加するわけですから、プロはプライドがあるから応募してこないかと思ったら結構出品してくれて、非常におもしろかったです。こうしたことも含めて、今度きさやかですがキャリアアップ・センターをつくったんです。これは普通の大学であれば就職の面倒や情報を提供しますけれど、音楽学部はいろいろな橋渡しをするマネジメント的なことを含め、美術学部は卒業生たちが、アーティストなり工芸家としてどうやって身を立て成長していくのかというところまで情報提供しようと。例えば作家が画廊に提供するポートフォリオのつくり方まで先輩のアーティストに来てもらって学生に教えてもらう。非常にプラクティカルなことも含めてやっていまして、今後はさらに重要になってくると思っています。

また学生たちは卒業後NPOをつくったり、あるいは一軒家を借りて集団生活したりするわけです。一義的には在学中の教育が大事ですが、我々もそういう情報を入手・提供し、卒業後もこの街で活動しながら、発表や販売の機会をつくってあげようとしています。最近では京都市が若いコーディネーターを雇って、空き家になっている町家のオーナーと交渉し、低賃金でアーティストなどに貸す「町家プロジェクト」を始めました。ことも連携しアーティストたちに何年か滞在してもらい、身を立てるためのノウハウを習得してもらおうと思っています。

ただ、先ほど言ったように学生は真面目だけれど、普通にやっているとコツコツだけなんですね。これを覇気がないと思っているのは多分大人のせいで、チャンスを与えると震災時の獅子奮迅の働きもそうですが、本当に燃え上がるんですね。むしろ閉塞状況をつくっている我々がまず意識改革をしないと、と思っています。

宮田　おっしゃるとおりです。そこへ直面させるきっかけづくりが僕らの仕事だろうと思います。

学生の問題は自らの問題

――そもそも芸術とは個々の内面から生まれてくるものですから、学生に対してやや過保護なのではないですか。

建畠　今の学生の問題というのは、我々の問題でもあるんです。我々の意識をそのままに、学生たちをもっとポジティブに、ある意味ではハチャメチャに頑張れ、というのはおこがましい話で、お前はどうなんだという話になってくるんですね。それでは大学が本当にそこまで改革できるのか、自分たちの意識が変革できるのか。だからこそ学生たちの問題は自分たちの問題だというふうに思わなければならない。そうするとなかなか難しいですね。大学というのはある意味では変わらないところに価値があるわけです。蓄積と伝統という価値。これは普通の企業とは違う。普通の企業だとリノベーションして一挙に蘇る――日航みたいなケースがありますね。奇蹟とも言われている。あれは大学では採れないですね。大学にはこれだけの重厚な蓄積があって、その中で培われたものを生かしながら意識改革していくというのは、超絶技巧みたいなもので、口で言うのは易しいけれどどうしたらいいんだ、みたいな。だから宮田学長をウォッチングしていこうかなと。（笑）

宮田　企業ではないとおっしゃったけれどまさしくその通りで、また崩れませんからね。崩れたら大学が崩壊したのと同じことですから。学長になったときの話で恐縮ですが、前任者が平山郁夫先生ですし、お名前だけで全てが動く人から、得体の知れない自分がなったということで、同じ事はしないでおこうという思いがあって、元学長の澄川喜一先生から「宮田君、あんまり頑張らなくていいよ、60過きたら御礼奉公なんだから気楽にやれや」と言われたら、凄い楽になったんですね。ああそうかと思って、オレ流でいいんだと考えたときに、ふと学生時代を思い出したんです。偉そうな先生ほど口だけなんだよね（笑）、これは考えなきゃいけないなと。俺はつくる方はまあまあだ、あとは何をやるかといったら行動だと思ったんです。学長がやっているからという意識と、学長がこの位で止めているからという意識を、学長自らが見せて、それを越えるか越えないかの線は自分たちで判断できるなと。そういう基軸をつくる仕事が、東京藝大の新しい改革かなと思ったんです。これは、どんな事をやってもアカデミズムは崩れないという保障がある上でやっていやれば、これはただのアホだから、その辺の関係の中でまあメダカが水面でチョロチョロやっている程度なんですけれどね。

建畠　ずい分大きなメダカで。（笑）

宮田　いやいや。それから学生や街の人たちがずい分勇気を持って、よしやって行こうと。そしてやって行くには手ぶらじゃなく、何か持って動かなきゃダメだ。衣装を着るとか理論武装するとか作品を持つとかして外へ出ないと、ただの裸の王様になっちゃうなと。そういうことをすごく分かってくれたんです。だから今の若者は、まさしく建畠学長のお話のように、我々を見て彼らがそれを判断している。若者は冷めているのではなくものすごく冷静ですからね。冷静に機をうかがっているんですよ。そのチャンスを逃さずに出られる力を持った若者を育てるのが、僕らの仕事だという気がしているんです。

建畠　今おっしゃった事はまさしく賛成で、ただ宮田学長は美術家、僕は美術館がバックボーンですから、同じスタンスに立つほどのキャリアはないですが、僕は逆にキュレーターとしてアーティストがどのように自己実現をしていくかというプロセスを見てきたり、そこに介在したりしてきて、その具体的な経験から言うと二つあって、出始めたら出切らなくちゃいけない。出ない時は無理しないでコツコツ自分のバックボーンを固めていく。出る時には遠慮してはいけない、ガンガン行かなくてはいけないと。それは展覧会をやるときも公募展に応募するときも、あるいは国際展に出ていくとか海外に移るとか、いろいろあると思うんだけれど。ただその判断の見極めが難しい。自己実現のキャリアがある先生はそのタイミングをアドバイスしてあげる必要はある。もちろん本人の才能だし努力もしなければダメで、運不運もあるけれど、「出る時には出切る」と言い放つだけでなく、場所を用意してあげることも役割と思っています。

宮田　建畠学長は美術館の館長さんでもあるわけで、京都芸大にとっては素晴らしい方をお迎えしたなと思っているんです。なぜかと言うと、美術館というのは非常に洗練された士俵ですから、そこに登場させる人物をキュレーターとして選択できる権利、力というか目を、お持ちなわけです。その中で成熟した人たちだけではなくて、これから成熟するかもしれない人たちに対しての、千里眼や審美眼もお持ちですから。そういう意味では京都芸大のこれから、明日にはとても期待が持てますし、それに学びたいと思います。

右上：『「今（いま）」と「心（こころ）」が重なった文字で、「念ずる」、「念」という字です。』平成23年度卒業・修了式で宮田学長が学生に贈った言葉と揮毫の一字。
左下：埼玉県立近代美術館長としても活躍する建畠学長。キュレーターとして企画した「草間彌生 永遠の永遠の永遠」は2012年全国4会場を巡回し合わせて35万人超の入場者を数えた。
対談撮影：川島保彦　写真提供：東京藝術大学、京都市立芸術大学、埼玉県立近代美術館

アートは社会とどう向き合うか

――アートがこれからの社会とどう向き合うか、その意味で震災が大きな転機になっているんではないですか。

宮田　震災は真っ白なキャンバスから真っ黒なキャンバスへいきなり変わったわけです。その黒いキャンバスにどう絵を描いて空間と美しさをつくっていくか、これが僕らの仕事なんです。その仕事に絵具はどういうものを使うかということはあるとして、どちらにしても美しいものをつくる。心ときめくものにすることによって元気を出していく。復興するのは現地の人ですから、元気印になるきっかけづくりが僕らの仕事ですからね。

建畠　震災は「アートが何の役に立つのか」を考える機会でもあったわけです。テオドール・アドルノという哲学者が言ったことに「アウシュビッツの後に詩を書くのは野蛮だ」という有名な言葉があるんです。それでは今この状況を知りながらアトリエに籠もって制作するのは野蛮なのか。野蛮と思えば止めればいいし、野蛮じゃないとしたらどういう意味があるんだと。それはすぐに答えは返ってこないんです。ただ制作者が制作する事がどういう意味を持つか、すごく真剣に考える機会になりましたね。

また、我々は忘却する動物で、忘却しなければ生きて行けないわけですけれど、それだからいろんな事をアートとして記憶の中に留めていく力があると思うんです。例えばピカソのゲルニカや丸木位里・俊の原爆の図は、相当の意味があった訳ですし。もちろんこれは絵だけでなく、映画やいろんな手段で記憶に留めていく。それはアーティストが持っている想像力が記憶をより普遍化して次世代へ受け継いでいくことでもあります。我々の中にそういう記憶のかけらを残していくことは、社会にとって重要なアートの役割だと思うんです。

それともう一つは他者に対する想像力。これは非常に大事で、アートが最も想像力によってできる世界である。現実だけを見せるのではなく、そこから救済へ向かう、あるいは癒しという言葉もあるでしょうけれど、そういうものの中にアーティストは介在しているのだろうと。たしかに「死んでいく人」を見て、あるいはアウシュビッツを見て何ができたんだと言われると、答えられないところがあります。でも「救済のために少しは役に立ちました、ハイお終い」ということではなく、そういう問いをずっと重いものとして引きずっていかなければならないと思っているんです。

宮田　お話を聞いていても、精神的な部分で現地の人たちを勇気づける何かとか、拠り所になるようなものをつくっていくというのは大事なことですね。東京藝大では、流された松を使って親子地蔵を彫り陸前高田に贈ったんです。お地蔵さんそのものをつくることが大変なアーカイブですから。地蔵とは何であるか。永くこの世に残るわけですから立派な地蔵でなければいけない。今までお地蔵さんをただぼうっと見ていた者が、自分が作ったものが信仰の対象、心の拠り所になる。親や子供が亡くなり何にも残らなかった。その拠り所といったら手を合わせるしかない、その対象に地蔵がある。それがどのくらい凄いものでなければならないか、といったときに学生は真剣につくるわけです。それを陸前高田に納めたことによって、どれだけの人が救われたか。それがその人たちではない次の時代になっても心の拠り所になるということは、アートの仕事の一つで3・11が大きなきっかけになっていると思うんです。

そうすると、話は戻りますが芸術大学がやるべきことというのは、そういう底力みたいなものを確実に今に生かせる仕事が、根本にある気がします。そして今に生かせるということは、未来から見たらそれはアーカイブになるわけで、そのときに自然とは厳しいもので、淘汰されて良いものしか残らないんですね。結果的には全てが地球に戻るんだけれども、良いものだけは確実に残る。その良いものを残す仕事が、何十年、何百年経ったときに「これがそうだったんだ」と次世代の人たちが、それを超えるものをつくっていける基礎づくりでもあるわけです。

ずっと流れていると分からないけれど、一段、段が切れるときがあって、それは不幸な切れ方もあれば喜びの切れ方もあるでしょうけれども。その切れたことを禍とするか、歴史の新しい一ページとするかは、僕らの心の持ちようですから。これは経済的、政治的な人たちもやるでしょうが、芸術的な人たちがやったときのものが確実に残る気がするんです。そのときのためにやっているんですが、非常に応用力があるから次のときになっても、まさしくそのためにつくったようになる。これが芸術のおもしろいところ。曖昧なんですが、その曖昧のおもしろさは実に的を射た、その時、それ以外にない重さになっているんだという気がするんです。

建畠　個別の事の中で生まれた表現が普遍的な意味を持つということですね。それが真実であれば。

宮田　そこに行き着きますね。

――普遍的な真実を求めて新年のスタートをきりたいですね。本日はどうも有難うございました。

（2012年11月26日、東京藝術大学にて）

パブリックアートの未来を拓く
Toward Public Art for the Future

新潟空港メインエントランス 「佐渡ものがたり」 H2.4m×W9.2m　ステンドグラス　原画・監修：宮田亮平

工房制作風景

クレアーレ熱海ゆがわら工房

クレアーレ
http://crearejp.com/
■㈱NKBパブリックアート本部 〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-1-3 東京宝塚ビル TEL 03-3504-2107 FAX 03-3504-2113　■クレアーレ熱海ゆがわら工房 〒413-0001 静岡県熱海市泉230-1 TEL 0465-62-2034 FAX 0465-62-2195
※作品に関するお問い合わせ、及び、制作のご依頼、ご相談は㈱NKBパブリックアート本部までご連絡ください。